

# 福崎町の「旧聞異事」・ 「播磨国風土記」を楽しむ

播磨学研究所運営委員兼研究員

埴岡真弓



## 一、「播磨国風土記」について

京都の公家、三条西家に伝えられていた「播磨国風土記」の写本が、世に広く知られるようになったのは、嘉永五年（一八五二）国学者谷森善臣がその写本を筆写することを許されて以降のこと。「播磨国風土記」の写本は国宝に指定され、現在は天理大学附属天理図書館に所蔵されています。一三〇〇年前の国勢調査ともいわれる「風土記」（この呼称は平安時代以降）。常陸・播磨・出雲・肥前・豊後の五風土記だけがほぼ完全な姿を留めていることはよく知られていますが、その中でもっと

も遅く発見されたのが「播磨国風土記」で、研究が始まったのは明治になつてからのことでした。その代表的な著作の一つが、福崎町とゆかりの深い井上通泰の『播磨風土記新考』です。風土記研究に大きな足跡を残す通泰の研究は、弟柳田國男の勧めによるものだったとか。和銅六年（七一三）に出された官名は、地名に「好字」を付けることと、産物・土地の肥沃度・地名由来・古老が伝える「旧聞異事」という四つの項目の調査を命じるものでした。産物、土地の肥沃度が租・庸・調を納めさせる朝廷にとって大事なことは容易に想像が付きますが、後の二項目は現代人にとっては政治と無関係にも思えるものです。二項目としましたが、山や川、野原などの名前がどのようにして名付けられたかは

当然その土地の古老の言い伝えを聞き取って記録するわけですから、風土記の地名由来イコール「旧聞異事」と言っても差し支えないでしょう。風土記の地名由来の多くは、神々や天皇、氏族の事蹟によつて名付けられたとするものです。「古事記」「日本書紀」と同じように、古代の人々にとつてそれらの物語は歴史そのものであり、地方の歴史を知ることはその地方を治めるために必要だという考えから「旧聞異事」の蒐集が命じられたのではないのでしょうか。

こうして記録された「旧聞異事」の数々は、当時の歴史や文化、人々の暮らしを知るための貴重な手掛かりといえます。風土記の時代にあつた播磨国の十二の郡の内、残されているのは十郡の記録ですが、幸い福崎町が属した神前郡はその中に含まれていきます。六つの里があり、記載順に並べると

聖岡里（神河町周辺）・川辺里（市川町周辺）・高岡里（福崎町周辺）・多駝里（姫路市山田町、福崎町八千種周辺）・蔭山里（姫路市豊富町周辺）・的部里（姫路市香寺町周辺）となります。揖保郡や飾磨郡に比べると話の数は多くありませんが、遺称地とされる地名がいくつも残っています。神前郡を中心に、奥深い「播磨国風土記」の世界を覗いてみたいと思います。



写真1 神前山（千束山を含む）

## 二、「神前郡」の郡名由来

「神前郡」の記載は、他の郡と同様に、まず郡の名前がどうして名付けられたのかという郡名由来から始まります。

右、神前と號なづくる所以は、伊和の大神のみ子、建石敷命たにいしむのみこと、神前山いままに在すなはず。乃すなはち、神の在すなはずに因りて名と為し、故、神前の郡といふ。

つまり、建石敷命という神がおられるので神前と名付けたというのです。そして、この神の父神とされるのが「播磨国風土記」のみに登場する伊和大神、「播磨の国の神」とも称される興味深い神です。主に揖保郡、宍粟郡で活躍する神で、宍粟郡がもととは揖保郡であったことを考えると、揖保川流域で特に信仰を集めた神と考えられるでしょう。この神を祀る人々の本拠地は、宍粟市一宮町周辺、播磨の一宮であった伊和神社が鎮座している地域とされています。国占めをするため播磨各地を巡り行く姿が伝えられており、渡来系の神とされる天日槍命あめのひぼしと国占め争いをするエピソードをいくつも残しました。

多駝里糠岡にも、伊和の神と天日

槍命いさかおこが「各、軍を發して相戦ひまし

き」と記されています。また、「天

日槍命、軍、八千ひとありき。故、

八千軍野といふ」というのが現在の

福崎町八千種の地名由来です。「軍」

という文字が使われているのは神前

郡の記載だけで、市川流域で激しい

国占め争いが行われたことを示して

いるのかもしれませんが。市川の下流域

現在の姫路市東南部、手柄山付近を

中心とする地域は飾磨郡伊和里と呼

ばれていました。「積幡しさわ、他は

「宍粟」と表記)の郡の伊和君等が族、

到来たりて此に居」ため名付けられ

たと記されており、政治を司る国衙こくがが

置かれた姫路市中心部まで古くは

伊和大神の信仰が広がっていた、伊

和大神を祀る氏族によつて支配され

ていたと推測されます。

では、そうした強い勢力に信奉さ

れた伊和大神の御子神という位置づ

けは、何を意味しているのでしょうか。

伊和大神の御子神は、建石敷命だけ

ではありません。郡の記載中に記すと、

飾磨郡英賀里の阿賀比古命・阿賀比

売命、揖保郡林田里の伊勢都比古

命・伊勢都比売命、同郡出水里他の

石龍比古命・石龍比売命。どの御子神

にも母神の記載はなく、伊和大神の

子であるのみが記されています。阿

賀比古命・阿賀比売命(表記は違

うが)伊勢都比古命・

伊勢都比売命(姫路市林田町に上

下伊勢あり)はその土地の地名を

冠しており、土着の神であったに

違いありません。英賀里、林田里を

伊和大神勢力が支配下に置いた時、

神々の体系も変更を余儀な

くされた、つまり、そもそ

も祀られていた土地の神が

御子神という形で伊和大神

の下位に位置づけられたの

ではないでしょうか。

神前郡域で広く信仰され

ていた神だった建石敷命も

また、伊和大神を祀る氏

族が宍粟郡から神前郡まで

勢力を伸ばしてきた時期が

あり、御子神という伝承が

残ったのではないかと考え

られます。ただ、建石敷命

以外の御子神はすべて、伊邪那岐・

伊邪那美(「古事記」表記)の神と

同じように男女二柱の神となつて

おり、男神のみの建石敷命は特色

ある御子神といえるでしょう。対

となる男女二柱の形は、荒御魂・

和御魂という神の御霊の持つ二面性

と関わっているのかもしれませんが。

また、建石敷命は、神前郡だけで

なく、現在の加東市・加西市に相当

する賀毛郡かちにも登場している点が

注目されます。賀毛郡では「建石



写真2 神前山の磐坐



命」と表記されていますが、建石敷命と同一の神ではないかと考えられています。都麻里の条には、昔、讚伎日子の神が丹波の氷上刀売ひかみとめに求婚し、断られたにもかかわらず強引に求婚を重ねたため、氷上刀売が立腹して建石命を雇って戦ったと記されています。また、法太里はぶだでは、讚伎日子と建石命が戦った時、讚伎日子が負けて手をつき匍はつて逃げたという話や、讚伎日子が逃げる時に建石命が坂に御冠を置いて堺としたという話が載っています。こうした伝承から、建石敷命は軍神としての信仰が強かったのではないかと、建石敷命を祀る神前郡の人々の勢力が賀毛郡にまで伸びていた時代があったのではないかと推測されます。

### 三、建石敷命という神

建石敷命のいます神前山は高岡里にあるとされ、現在も福崎町山崎に同名の山が存在します。麓に二之宮神社が鎮座しており、その峰は柳田國男が元は「洗足」ではなかったかと述べた「千束山せんぞく」へと続いています。

柳田は市川をまたいでヌツと表れる巨大な足の伝承を語り、汚れた足を洗えと命ずる妖怪「足洗い」の影に播磨の国を巡り歩いた神の姿を見ているますが、その指摘にはやはり鋭いものがあります。その神前山の山頂にあるのが、磐坐いわくらとされる大きな岩です。高岡里を一望する山頂は、神を祀るに相応しい場所といえるでしょう。建石敷命は、その名が示すように「石」に対する信仰を基盤とする神だったのではないのでしょうか。揖保郡出水里の石龍比古命・石龍比売命もその名に「石」を冠しており、重要な神の属性を示していると考えられます。石龍比古命・石龍比売命を祭神とする神社としては、たつの市揖西町に鎮座する式内社・祝田神社が有名ですが、同市の龍野町日山に鎮座する粒坐天照神社の奥宮とされる天祇神社（台山の山中）には石龍比古命・石龍比売命と伝えられる二つの立石が祀られています。風土記時代に遡るものとすることは難しいでしょうが、台山は最近「粒丘いひほ」の候補地の一つとされる場所であり、

天祇神社の伝承も注目されます。建石敷命の父神とされる伊和大神の名前自体、「いわ」即ち岩・石の音から生まれた神名だとも考えられます。平成二十五年に執行された二十一年に一度の「三ツ山大祭」は姫路の射楯兵主神社、播磨国総社で行われましたが、江戸時代の記録には総社の三ツ山・一ツ山大祭は一宮である伊和神社の三ツ山・一ツ山の神事を模したものと記されています。この伊和神社の

三ツ山・一ツ山の神事は高畑山・花咲山・白倉山の三山、そして宮山という山を祀るもので、それぞれの山中にある磐坐の祠を六十年に一度、二十一年に一度新しいものと取り替えます。つまり、自然の山に対する信仰、その神体は磐坐であるわけですが、これが本来の三ツ山・一ツ山だというわけです。また、伊和神社本殿裏には二羽の鶴が化したとされる二つの石、「鶴石」が大切に祀られており、神社の由緒にまつわる一



写真3 立石神社の巨岩（神河町）

種の磐坐と考えられます。石・岩に対する日本人の信仰について、柳田國男も「石神問答」など多くの著作を残しました。「神々の我慢比べ」として喧伝おほむなちされている、神前郡聖岡里の大汝命すくぬひこねと小比古尼命の話にも石・岩が登場します。この二柱の神の「壘と屎とは、石と成りて今に亡せず」とされ、今も日吉神社（神崎郡神河町）の裏山には「壘岩」と呼ばれる巨岩がそそ

り立っています。建石敷命との関連で興味深いのは、神河町宮前に鎮座する立岩神社です。「たていわ」という神社名と神名との共通性もあります。この神社の本来のご神体と思われるのは川を隔ててそびえる巨岩、巨岩というより巨大な岩盤なのです。かつてはその上に祠があったといい、今もその巨岩の上に咲く植物を取ると祟りがあるという言い伝えがあるとか。その存在感は圧倒的で、古代の人々がこうした巨岩・巨石に対して深い信仰を抱くのは自然なことでしょう。

石に対する信仰の本質を考えさせる伝承が、「播磨国風土記」にはいくつも残されています。たとえば、伊和大神の御子神として取り上げた石龍比古命・石龍比売命の出水里の伝承は、この男女二柱の神が水争いをしたというものです。伊和大神自身にも、宍禾郡安師里で求婚を断られて腹を立て、石で川の流れを塞ぎ止めたという伝承が残っています。これらの神々が水を支配する力を持っていたと解釈できる伝承

です。石龍比古命・石龍比売命と伝えられる石神が立つ天祗神社には小さな泉があり、昭和三十年代まで雨乞いが行われていたと聞きました。粒丘では伊和大神が杖を挿したところから「寒泉」が流れ出たと、風土記には記されています。水は農耕に不可欠であり、古代の人々にとってその重要性はより大きかったことでしょう。早魃、洪水など、水にまつわる自然現象は神々の仕業として理解されていました。石神の属性に水の支配があると考えられることは、伊和大神をめぐる様々な伝承を読み解く鍵の一つではないでしょうか。建石敷命についても考える際にも、手掛かりとする必要があります。

「播磨国風土記」に書きとどめられた「旧聞異事」全てが、古代の歴史や文化を様々な角度から検討するための貴重な手掛かりといえるかもしれません。一三〇〇年前すでに伝承となっていたのですから、もともと古い時代の記憶が風土記の中には閉じこめられているわけです。

古墳時代にまで遡る記憶があるとも考えられています。物語として楽しむだけでなく、風土記の伝承を手掛かりに現地を訪ね、今も息づいている古代の人々の想いに触れ、自分たちの身近な歴史や文化を発見、あるいは再発見してみませんか。

